

令和5年度 能美市立和氣小学校 学校経営具現化に向けた学校評価表(最終)

項目	具体的方策	主担当	【評価指標】 〔成果指標〕 〔努力指標〕 〔満足度指標〕	【評価の根拠】 達成度判断基準	評価	前期評価からの 分析と考察	今後の改善策	学校運営 協議会 による意見	後期評価	成果と課題	学校運営 協議会 による意見	
1	組織的な 学校運営		【努力指標】 自分の担当分掌について、毎月ロードマップを活用し、組織的・計画的に運用する。	【教師アンケート】 「自分の担当分掌について、毎月ロードマップを検証し、適切な取組となるよう見直しを行った」と肯定的に回答する教師の割合が A：80％以上 B：70％以上 C：60％以上 D：60％未満	【教師】 85.7% A	・昨年度100％から85.7％となり、B評価やC評価の「どちらかという」でできなかった」と答える教職員の割合が多かった。新任の教職員が多く、担当分掌を見直しをもって行うことが難しくかったと考えられる。 ・コロナ以前の取組も復活し、取組ごとの見直し・検討にも時間を要したことも計画的な運用につなげられなかった取組もあった。	・ロードマップを確認し、夏休みでの三部会・主任会議を組織的・計画的に進め、2学期の取組を充実したものとする。10月に中間チェックする。 ・各主任を中心に各部の取組をやり切るために、教務から各主任への声かけはもちろん、各部間の連携をコーディネートしていく。各担当が取り組み後にすぐにふり返りを行い、来年度に向けて提案文書の訂正をしておく。	残業時間の削減が結果に表れてきているのはよい。	【教師】 84.6% A	【成果】 ・各主任を中心に、ロードマップをもとに計画的に進めることができた。取組の成果や課題を来年度に向けて修正することができた。 【課題】 ・三部会や主任会議で十分に話し合う時間をもう少し確保するため、日限等の工夫をしていく。		
		教頭	業務の平準化やワークライフバランス意識の向上に努めると共に協力・協働による効率的な業務遂行を図る。	【学校運営において、業務の平準化やワークライフバランスを意識し、業務改善に努めた」と回答する教師の割合が A：90％以上 B：80％以上 C：70％以上 D：70％未満	【教師】 100% A	・職員朝礼の廃止、職員終礼は週1回としたことで、参集する時間を削減することができた。 教員チャットルームによる、日常的で迅速な情報共有に努めているが活用の意識には職員間で差が見られる。 ・SSSの積極的な活用により事務的作業の軽減が図られている。教員個々の業務改善ワークライフバランスに対する意識は高く、見直しを促した効率的な業務遂行が図られている。 ・業務の平準化に対する意識も高まり、学校規模に関わらず存在する業務数を少ない職員数で均すことには限界があり、改善には難しさがある。	・100％のうちB回答64％の割合がA回答にシフトするよう、個々が日々のどんな業務をどの程度省力化できたのか認識（見える化）できるようにする。まずは、SSSの1週間の勤務時間をスプレッドシートで共有し、職員によって偏りなく、さらに効率的な業務依頼を実現することで多忙感軽減に努める。 ・様々な会への参加メンバーの精選に努める。 ・各種取組に見直しをもって進められるよう、計画段階から実施までの手順を残すようにする。		【教師】 92.9% A	【成果】 ・今年度は、異動者も多かったため各分掌努めて反省と申し送りを残してきた。計画段階からの取組については、引き継ぎ資料だけでなく日常的なコミュニケーションを図る時間的余裕を確保していくことが大事。 ・様々な会への出席の頻りは改善傾向にある。次年度も計画的に会を運営していく必要がある。 【課題】 ・削減ありきではなく、教育活動の本質を捉えた業務改善が図られるよう共通理解を深めて行く必要がある。 ・CB賞与がない職員との共有を考え、以前的大型ディスプレイ再活用を試みたが断念した。	特になし	
2	確かな 学力の 育成	永吉	【授業力の向上】 児童が「わかる」「できる」授業をつくる。	【努力指標】 児童が「わかる」「できる」授業をつくることができている。	【教師】 100% A	【教師】 91.7% A	【児童】 91.7% A	前期の取り組みを継続し、適用題までを含めた授業づくりを実施していく。 適用題の丸付けは、①教師が行なう。②終わった児童がミニ先生になって行う。③端末を活用する等の方法を試しながら、より短時間で的確に見取りができる方法を模索していく。	【教師】 100% A	【成果】 ・適用題までを含めた授業づくりを実施してきたことで、低中学年の児童アンケート結果は向上した。ただし、高学年の数値が大きく下がったため、全体のアンケート結果数値は下がった。実際に該当学年の児童に聞き取りをすると、内容が前期時点より難しくなってきたとのことだった。一人で問題を解くことが難しいとのことだった。	・一人一台端末を生かして子どもたちの表現力・発信力を高めたい。 （プレゼンカード・ディスカッション力） 中学へ行っても自信をもてる子になってほしい。	
			【GIGAスクールの推進】 ICTを効果的に活用した授業構想を立て、実践を進める。	【努力指標】 ICTをねらい達成に向けて活用した授業構想を立て、実践を進めるように努めている。	【教師】 84.6% A	【教師】 84.6% A	クロームブックを1日〇回使うという目標から「ねらいを達成するためのICT活用」という目標に変えたことで、教師の意識は「とにかく使う」から「ねらい達成」にうまく変えることができた。 ねらい達成のための活用頻度が更に高まるとよい。	小松教育事務所の「GIGA NAVI」や能美市の「withクロームスタイル機」の実践例を参考にし、ねらい達成のためのICT活用を進める。 ICTサポーターによる端末活用の研修会を行い、個別最適化・協働的な学びに繋がれそうな活用方法を検討していく。	【成果】 ・オクリンクを使った学び合いが浸透してきており、どの学年でもねらいを達成するためのICT活用が進んできている。 【課題】 教材研究の中で校外の実践を取り入れることがなかなかできなかったため、今後は他校の実践も参考にしていきたい。			
		竹田	【学力の向上①】 AIドリルや帯タイムを活用して基礎学力の定着、習熟を図る。	【成果指標】 単元末テストの平均（知識及び技能）で（低学年）85点以上（高学年）80点以上達成した児童の割合が8割以上を目指す。	【各種教育データ】 単元末テスト（知識及び技能）で低学年85点、高学年80点以上達成した児童の割合が、 A：80％以上 B：70％以上 C：60％以上 D：60％未満	【国際】 60.4% C	【算数】 74.7% B	・低学年で達成した児童の割合は国際56.2％、算数66％、高学年は国際63.2％、算数80.5％であった。 ・国際は、2年以上のすべての学年で達成率が70％未満であった。漢字の書き取りやことばの使い方、意味理解につまずきがあると考えられる。 ・算数は、今年度より全校共通のワークで定着・習熟の徹底と見取りを行ったが、高学年を中心に少しではあるが伸びが見られた。	・学力向上プランに基づいた指導の徹底を行い、個別支援を要する児童への支援体制を整える。（支援員の配置、帯タイムでの級外支援、支援会議や進級との連携などによる組織的支援） ・漢字の書き取りや言葉の学習については、ドリルパークとナビマ（AIドリル）を使い分けて字形をしっかりとらえたり、ことばの使い方や意味理解を復習したりし、定着を図る。同時に教師はタイムリーに習熟度を把握し、指導改善・個別支援に努める。	自分の判断で、よりよく豊かな生活のためにICTを使える子供を育ててほしい。	【教師】 72.3% B	【成果】 ・国際について、屋帯タイムで文章読み取りドリルに取り組み、自分で読み取るための「線引き」、デジタル黒板を活用した教師の解説が成果につながったと考えられる。今後模範となる文に線を引くことができるよう、継続的に指導していく。 ・算数について、支援員による個別支援、毎時間の適用題による見取りや個別指導の徹底を図ったことが結果につながっている。 【課題】 ・児童がそれぞれに目標をもち、それに向かって主体的に学習に取り組む姿勢を育てることが課題である。児童自ら進んで学ぶことができるよう、AIドリル等を一層活用し、児童主体の授業づくりと併せて指導していく。
			堀井	【学力の向上②】 読書活動を充実させ、読書の質の向上を図る。	【成果指標】 各学年のおすすめ10冊を1年間で読むことができる。	【各種教育データ】 「おすすめ10冊」のチェックカードを前期、後期に集め、検証する。（達成率） 前期…5冊以上 後期…10冊以上達成した児童の割合が、それぞれ A：80％以上 B：70％以上 C：60％以上 D：60％未満	1年28人 2年0人 3年0人 4年30人 5年6人 6年14人 41.6% D	・5冊達成できた児童の割合が学年によってばらつきがでた。休み時間に利用できる冊が増えたことと、朝読書でおすすめの本を読むと決めたことで、昨年同時期より5冊達成者の割合が増えた。（昨年度32％）	・教職員への取組の周知を図り、「おすすめの本」の利用の進捗状況を伝え、声かけをする。 ・おすすめの本10冊達成者を集会で名前を呼び表彰することで、達成できるような意欲をもたせる。集会では必ずおすすめの本や読書の良さを伝えていく。（2学期2回、3学期2回） ・季節のイベントにおすすめの本を絡めたりする。	1年31人 2年6人 3年26人 4年31人 5年7人 6年18人 や13人 や22人 や31人 【児童】 73% B	【成果】 ・おすすめの本を読むように声をかけることで、その学年に見合った本を手に取り、読書の幅や質を高めることができた。 ・集会で表彰したことで、達成できるよう意識する児童がいた。 ・委員会のイベントにおすすめの本を絡めたことで、低学年を中心に進んでおすすめの本を借りていた。 【課題】 ・教職員への取り組みの周知を図ったが、意識の差はうめられなかった。	・地域の人とも学びに関われる機会がもっと増えることよいのではないかな。

3	豊かな心の育成	【児童会活動の充実】 児童主体の児童会活動を通して、主体的実践的な態度を育成する。	【成果指標】 児童が児童会活動に積極的に参加し、児童会目標を達成しようとしている。（児童会活動とは、各行事、委員会の取組、たてわり活動など）	【教師アンケート】 「授業が主体的に取り組めるように働きかけた。」と肯定的に回答する教師の割合が A：90％以上 B：80％以上 C：70％以上 D：70％未満 【児童アンケート】1～4年「児童会活動の取組に前向きにさんかできた。」5・6年「学校をよりよくするために進んで児童会活動に取り組むことができた。」との肯定的な回答する児童の割合が A：90％以上 B：80％以上 C：70％以上 D：70％未満	【教師】100％ A 【児童】90.5％ A	・児童アンケートの結果、学校全体では90.5％とA評価であったが内訳を見ると、5・6年生が89.7％、1～4年生が92.4％と実質活動している高学年の肯定的な回答率である児童の割合が予想より少ないと感じた。委員会活動の内容が充実したと評価していても、アンケートを実施する際に、児童が活動を楽しんでいないと感じてアンケートに答えられないような手立てが必要である。	・前期委員会の任期は9月末の運動会後までとなる運動会を通して、各委員会活動の活動内容も児童主体の充実したものにすることができた。・行事や各委員会の季節に応じた取組を通して、1～4年生にも行事や委員会の仕事内容を知れる機会を設けた。各委員会の取組に個人的に、またはクラスとして参加する機会を設けて、頑張ったことと感謝される取組とする。そうすることで、全校児童（高学年も含めて）の自己肯定感の向上や達成感・成就感につながると思える。	【教師】100％ A 【児童】91.7％ A	いじめや不登校傾向児童対応アイデアの一つとして、ロールプレイを見て自分たちで考え、議論させている取組をメディアで見たことがあり、子供たちが、ほめてもらえる機会を増やすとよい。	【成果】 ・高学年は自分の思いをクローンなどで表現する機会を多く設定したことで、自己を振り返りしっかりと自分のこととして捉えることができた。 【課題】 ・低学年は資料の中の語としてとらえがちであるため、読末などで、再度自分のこととして、考えさせる場と時間をもつと設定すると良かった。年度当初に模範授業をする。	・最終的には子供がどう変わったかが大事である。今後もしもわたしの自立したつらがる働きかけを継続してほしい。
		【道徳授業の工夫】 道徳の指導法を工夫し、考えを聴き合い伝え合う授業づくりを行い、道徳的実践意欲を高める。	【満足度指標】 児童が道徳の授業で学んだことを生活に結び付けたり生かしたりしようとしている。	【教師アンケート】 「授業の終末に自分ごととしてとらえさせる時間をとることができた」とする教師の割合が A：80％以上 B：70％以上 C：60％以上 D：60％未満 【児童アンケート】「道徳の授業の中で自分ごととして考えることができた」と肯定的に回答する児童の割合が A：80％以上 B：70％以上 C：60％以上 D：60％未満	【教師】100％ A 【児童】91.0％ A	・アンケートの結果から教師は授業で生活に結び付けたいことが多く、またほとんどの児童も毎回の道徳の授業が自分ごととしてとらえて考えていることがうかがえる。読末の振り返りの際、教師側で自分ごととしてとらえさせる場を設け、資料が自分ごととして捉えにくいものでも授業の展開の中でより考えさせることのできる工夫が中々できていないと思える。	・夏休み中に研修会を開き、より児童が多角的・多面的に考えることができるように10分を効果的に使った道徳の授業を紹介し、2学期の授業につなげた。 ・今後引き続き自分事として捉えられるよう、4月の授業を再確認し、道徳的実践意欲の高まりにつなげる。	【教師】100％ A 【児童】89.6％ A			
		【校内支援体制の充実】 不登校等の未然防止のための校内支援体制や教育相談、児童理解の会を充実させ、専門組織との連携に努める。	【努力指標】 情報交換を密にし、担任や各主任が連携・協働し、諸課題の早期解決・未然防止に努める。	【教師アンケート】 「情報交換を密にするため、校内支援会議を学期に2回設け、諸課題の早期解決・未然防止に努めている」と肯定的に回答した教師が A：90％ B：80％ C：70％ D：70％以下	【教師】100％ A	・校内支援会議を1学期に2回（夏季休業中に1回を含む）実施し、児童の困り感を把握した。担任だけでなく教員間で連携を取り、学校として対応できるような支援体制を固めた。 ・職員会議の後に、「児童理解の会」を設けて児童の様子や支援の必要性等の共通理解を固めた。 ・学期はじめ（スタートから3日間）に担任が気付いた児童の様子を一覧にまとめ、情報を共有した。 ・GW前に長欠児童を中心に児童の様子に注視することを職員に促した。 ・上記の4つの取組から校内支援体制を充実させてきた。	・不登校児童、不登校になりうるような可能性がある児童に対して、情報の共有と手立てを考案できる機会を確保してきている。 ・教育相談担当が中心になってSCとの連携を固め、児童の様子を把握したり児童に合ったアプローチの仕方を検討し、児童理解につなげた支援体制を固めたりする。夏季休業中にSCを講師としてお招きし、不登校等への対応について知識を深める機会を設けた。 ・学習の理解度と不登校との関係性について、職員の理解を深める。授業において「生徒指導の4つの視点」を意識して授業を行い、児童の学習における困り感などを減らした。	【教師】100％ A	【成果】 ・欠席、遅刻が続く児童の共有を行いSGとつなげることができた。 ・夏季休業中にSGを講師とした不登校対応について考える研修を行い、夏休み明けの言葉かけや対応の工夫に生かすことができた。 ・「能力ある学校づくり」の観点から生徒指導の4つの視点を職員室内に掲示し、授業改善を図るとともに児童理解に生かすことができた。 【課題】 ・相談室をハード・ソフト面で改善し、ニーズに応じた運営をしていきたい。 ・スケジュール管理を明確な形にし、SGとの連携を充実させていきたい。 ・「生徒指導の4つの視点」を学校研究の全体構想図に位置づけ、授業改善に努める。		
4	健康な身体	【体力向上の工夫】 体力アップ1校1プランの取組等を推進し、体力の向上を図る。	【成果指標】 3年以上の4クラスで「上体起こし」と「長座体前屈」の記録を6月に計測し、それよりも12月には、「上体起こし」で2回以上、「長座体前屈」で3cm以上記録をのばす。	【各種教育データ】 【体力テスト①②の結果】 3年以上の4クラスで「上体起こし」と「長座体前屈」の記録を6月に計測し、それよりも12月には、「上体起こし」で2回以上、「長座体前屈」で3cm以上記録をのばすことができたのは3学年中、 A：4学年が達成 B：3学年が達成 C：2学年が達成 D：1学年が達成	【教師】100％ A 【児童】89.9％ B	・2学期の体育の中で、上体起こし・長座体前屈の記録の伸びにつながる柔軟体操・バレーでの体力作りを取り組む。夏休み中に職員で有効な柔軟体操やバレーでの体力づくりについての研修を行う。 結果として、3年生は、長座体前屈が1.5cm、上体起こしが2.0cmの伸び、4年生は、長座体前屈が2.0cm、上体起こしが2.0cmの伸び、5年生は、長座体前屈が1.0cm、上体起こしが2.7回の伸び、6年生は、長座体前屈が3.0cm、上体起こしが0.3回の伸び、項目の8つのうち8つも記録が伸びた。ただし、目標値をクリアしたのは4つだった。	【教師】100％ A 【児童】89.9％ B	【成果】 ・上体起こしは筋力をつける取り組みをすればするほど、特に回数が多い子ほど、結果は出るのだと言える。すべての目標には達しなかったが、取り組み自体は間違いないでなかったと考える。 【課題】 ・夏季休業中に計測したことで長座体前屈の伸びが少なかったと考える。また、長座体前屈は年齢的に行う事で大きく記録が伸びる前目ではないと感じた。今後、ストレッチなど柔軟性を身に付ける取り組みの工夫が必要である。	・体力向上について、計測のアップも重要である。		
		【生活習慣の確立】 「早寝早起き」の習慣化やメディア利用の約束を行い、基本的な生活習慣を確立することで、心身の健康の保持増進を図る。	【成果指標】 メディア利用の約束を守り、早寝早起きと睡眠の大切さを理解している。	【生活アンケート・保護者アンケート】 【生活アンケート】 「メディア利用の約束を守り、早寝早起きができる」と回答している児童の割合が A：80％以上 B：70％以上 C：60％以上 D：60％未満 【保護者アンケート】 8時間以上の睡眠時間（低：9時間、高：8時間）を週に4日以上とすることを心がけていると回答する保護者の割合が A：90％以上 B：80％以上 C：70％以上 D：70％未満	【教師】100％ A 【児童】71.7％ B 【保護者】89.9％ B	・夏休み中は生活リズムが乱れていることが考えられるため、登校日から「生活リズム見直しシート」の取組を行い、2学期をスムーズにスタートさせられるようにする。 ・学校保健委員会前に、児童・保護者に生活アンケートを行い、それぞれの生活習慣に対する考え方や、困り感などを把握する。 ・11月の学校保健委員会で「睡眠」をテーマに取り上げ、メディア利用と睡眠の相互関係について児童・保護者に啓発する。 ・学校保健委員会後、生活習慣チェックを行い、家庭で生活習慣改善に向けて取り組む。	【教師】100％ A 【児童】62.8％ C 【保護者】90.1％ A	【成果】 ・11月の学校保健委員会で「よいねむり」について啓発し、12月の生活習慣見直しシートで「よいねむり」のための取組を実施した結果、寝つきが悪いと答えた児童が10月19.8％から1月19.0％に減少した。 【課題】 ・早起き（6時半まで）ができていない児童は65％、早寝（1・2年9時、3・4年9時半、5・6年10時）ができていない児童は61％であった。早寝では、2年生で20ポイント、4年生で26ポイント低くなっているが、目標時刻を学年で区切っていることも影響していると考えられる。 ・生活習慣見直しシートの取組では、元々規則正しい生活を送っている児童は意識的だが、生活習慣の乱れている児童はなかなか意識的に取り組むことができていないようだった。それぞれの家庭で生活習慣を養えることはなかなか難しいと考えられるが、今後早寝早起きの重要性や望ましいメディア利用の方法について啓発していきたい。	・子どもと保護者の評価にずれがある。なかや、なかなか難しいとは思いますが、基本的な生活習慣は大切なもので、もう少し踏み込んで呼びかけたいのではないかと。		
5	家庭・地域との連携	【ふるさと教育の推進】 ふるさとを知り、ふるさとを愛を育む、ふるさと教育を推進する。	【努力指標】 地域教材等地域の特色を生かしたふるさと教育の推進に努める。	【教師アンケート】 「地域教材等地域の特色を生かした教育活動を行った」と回答する教師の割合が A：100％以上 B：90％以上 C：80％以上 D：80％未満 【児童アンケート】 「生活科・総合や地域の方との学習を通してふるさとが好きだ」と回答する児童の割合が A：90％以上 B：80％以上 C：70％以上 D：70％未満	【教師】100％ A 【児童】91.7％ A	・各学年において、地域の自然、人材、特産物、施設等を生かした生活科、総合的な学習の時間が展開されている。また、前期は高学年において、地域の方々と講師として、虚空蔵太鼓等の地域文化・自然に親しみ「ふれあい活動」を実施した。自然観察クラブ、防災クラブ等においても地域人材を講師に、地域の自然や生き物に親しみ活動が充実できている。見守り隊は全家庭の所属により、通学時の和気町交差点の見守り当番が実現している。	・活動内容の見直しや新たな講師の人材発掘など、今後も持続可能な活動にするよう準備を進めていく必要がある。 ・夏休み中に地区バスツアーを実施し、校区にある学びの資源を研修することで職員のクラブへの理解を深める。 ・今後も取り組んでくださった方々に子供たちの学びの笑顔や感謝の気持ちを手紙にフィードバックしていく。	【教師】100％ A 【児童】94.9％ A 【保護者】90.1％ A	【成果】 ・後期においても児童・教師ともに高いA回答を示した。生活科・総合的な学習だけでなく、地域の人の、ものを最大限に生かした教育活動を年間を通して実施してきた成果と言える。職員の地域理解を深める機会を設けたことと効果が高かったと考えられる。 【課題】 ・今後に向けて、継続的に地域人材リストの充実を図ること。折に触れて、学校が求める人材を発掘し、協力の輪が広がるようにしたい。	・自身が見守り当番の日には、わが子の姿の様子を楽しみにしている。また、子供もそれを楽しみにしている様子である。	
		【あいさつができる子の育成】 気持ちよい挨拶ができる子を育てる。	【努力指標】 児童が相手意識を持って挨拶をしようとしている。	【児童アンケート】 「学校で「おはようございます、こんにちは、さようなら」のあいさつを自分からすることができた」と肯定的に回答する児童の割合が A：80％以上 B：70％以上 C：60％以上 D：60％未満 【保護者アンケート】 「子どもは地域や家庭で	【児童】93.1％ A 【保護者】93.9％ A	・児童、保護者アンケートの結果からどちらともA評価となった。前期の評価と比較すると1～4年生の結果が前期より2.7ポイント下降し、93.1％であった。全体では93.1％の結果であった。運営委員会が校内職員や地域の方に挨拶についてのインタビューをし、その様子を全校でみて、挨拶についての意味合いを知るとともに、相手意識をもつことができたと感じる。	・挨拶をする意味合い、相手意識は児童会・挨拶をされた相手はどんな気持ちになるのか、友達や先生、地域の方々にインタビューを設けて、児童の自発的な挨拶が身に付くようにしたい。	【児童】93.1％ A 【保護者】93.7％ A	【成果】 ・校内の職員や地域の方に児童会がインタビューすることで、児童主体の取り組みから挨拶について自分事として考えられる機会となった。また、取組後の児童アンケートではA評価の割合が高く、取組が児童に大きな影響を与えたと思う。 【課題】 ・取組後、挨拶をする意味合いを知ることではきたと感じるが、自発的な挨拶を身に付けるために、継続的に挨拶を意欲する機会を設ける必要がある。		